

前南アフリカ共和国ヨハネスブルグ日本人学校 校長
現北海道名寄市立風連中学校 校長 山本 昇一

プロローグ

66年前の1937年、今からおよそ4百万年前の人の頭蓋骨が発見された。それは、オーストラロピテクス・アフリカヌスと言う学名で、「ミセス プレス」と愛称で呼ばれている。南アフリカ共和国ヨハネスブルグの北西約40kmに位置する世界遺産「人類のゆりかご」と呼ばれる地域にあるスタークフォンテン洞窟で発見された。これが人類の祖先であり、ここから世界中に人類が広がって現在の私たちが存在するのだ。

1 はじめに

ヴィッツ大学（ヴィットウォーターズランド (Witwatersland) 大学) 内にある「オリジンズセンター (Origins Centre)」と言う施設は、名前の通り人類のオリジン、すなわち人類の起源にまつわる古人類学の研究施設兼博物館である。2006年3月にオープンした。

その後の南ア史については、さまざまな文献および刊行物で紹介されているので、それらを参照されたい。南アの人口や民族の人口割合など若干の遷移はあるものの、ここでは特段影響を及ぼさないとと思われるので省略する。

さて、平成22年度から3年間、ヨハネスブルグ日本人学校で勤務する機会をいただいた。これまでの教職経験を基にして、南アフリカ共和国に滞在している日本人の子ども達に、彼らの夢の実現のための一助を担うことができたことに対し皆様に心から謝意を表する次第である。

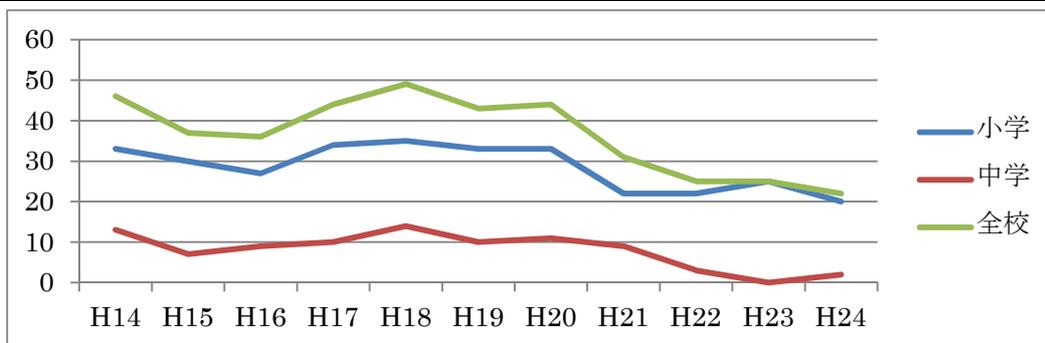
2 在外教育施設の現況等

- ・児童生徒数の推移について、過去10年間の状況は以下の通りです。

児童生徒数の推移(4月15日現在)

ヨハネスブルグ日本人学校

西暦	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012
年号	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24
小学部	33	30	27	34	35	33	33	22	22	25	20
中学部	13	7	9	10	14	10	11	9	3	0	2
全校	46	37	36	44	49	43	44	31	25	25	22



児童生徒数は派遣期間中若干の増減はあるものの30名を下回ることが恒常的になっていた。派遣教員数も学級数に応じて減少したため、複式学級編成や複式授業を実施して対応した。また、児童生徒数は年度内でも変動があり、4月現在の状況は上述の通りだが、2学期当初に増加する傾向が見られた。この現象は各企業や事業所の駐在員派遣に対する考え方にも寄るとこ

ろが多い。駐在員は4月当初に派遣になったとしても住環境・教育環境・生活環境が整うまでにはおよそ半年ほどを要するため、2学期当初から9月ごろにかけて児童生徒数が増加する傾向にあった。他国の日本人学校でも似たような傾向を示すところがあった。派遣教員数の減による学校教育に対する影響を心配する保護者も多く、日本人会、学校運営委員会、大使館等の支援をうけて派遣教員の定数維持について、文部科学大臣宛の嘆願書を提出したが大変残念な結果に終わった。日本国内の定員の8割の定員である在外教育施設にあって、教員数の減少はヨハネスのような小規模校にとっては学校運営上非常に厳しい状況におかれている。

3 学級編成と指導形態

上述のように平成24年度は派遣教員7名(管理職含む)で9クラス9教科を指導するには、複式による学級編成をせざるを得ない状況となった。派遣教員数を補うために現地採用の教員を考える必要が出て来た。アフリカにある他の2校は現地講師を採用していたので、本校でもそれを参考にして現地講師を採用する方向で派遣教員間での協議をしたが、現地採用を断念した。学級編成は児童生徒数の最も多い学年においても複式編成が避けられなくなった。

指導形態について保護者は初めての複式指導に対して不安や懸念を非常に強く持ち、何とか国語・算数・社会・理科の複式指導は見合わせて欲しいとの願いがPTAを通じても寄せられた。少人数化が進み学年の枠を超えた教育指導により、学習効果を高める為の工夫を従来同様に行った。特に技芸教科では隣接学年など複数の学年をひとまとまりにして指導を実施した。

年度末には保護者や運営委員会から次年度以降の学級編成や指導体制に関わる学校運営に対して改善を求める意見が多数寄せられ改善策を検討した。

4 教育課程の編成と特色ある教育活動

日本とは大きく環境の異なる在外教育施設では、出来るだけ日本の学校状況に近付けた環境とその国でなければできない環境を生かした教育活動とを、うまく均衡をとって教育課程に位置づける事が求められる。そしてそのことが、日本人学校の特色にも結びついている。特に、学校では、海外で長く生活している子ども達が一日本人として日本の文化をきちんと学ぶ教育活動を盛り込むことが必要である。また、子供たちが学んだ文化を現地の人々に紹介したり、現地の文化に触れたりすることを通じて、学校では子供たちの国際性や日本人としての自覚を培う目的がある。

(1) 現地の公立小学校との交流

10年以上の交流を継続してきた公立小学校が比較的近くにある。日本人学校との交流をいつも快く引き受けてくれた学校である。永続してくると一つの伝統となって交流のし易さも生まれて来る。これまでに先輩たちが培ってきた伝統を引き継いでいくことも、子どもたちにとってはとても大切な教育の側面である。平成22年度には、これらの伝統的な形態での交流を実施した。内容は、他の日本人学校と同様に、折り紙、あやとり、毛筆、けん玉、凧揚げなどを行った。現地校のほか高齢者或いは児童養護施設との交流会でも、英語をしっかりと身につけて、自分なりの表現で話すなどの実践的な活動を行った。

(2) 英語の力をつける工夫～全校英会話・現地英会話講師の採用

南アフリカ共和国は、日常生活は圧倒的に英語とアフリカーンス語が共通語として通用している社会である。保護者は、海外における生活上の英会話力を身につけている。駐在員は会社では英語が使えなければ意味をなさない。当然のことながら学校にも子どもたちへの英語教育の期待が高まる。従って学校では、実践的な英語力を学ばせる為に、南ア人の英語講師を採用して、週に3時間各学年の英会話を計画した。その他に、全校英会話の時間は、全て英語でゲームをしたり指示をしたりする全校集会の時間であるが、月に1回程度計画した。現地との交流会が近づくと、説明の仕方や自分の気持ちの伝え方などの英語の表現を英会話の時間に練習

していく。さらに特徴的なのは、始業式・終業式にも児童生徒代表の子供は、日本語と英語で抱負・反省等を発表する機会を設けて長年実施してきた。常に、必要に迫られて学習するので、発音や脈絡などを含めた表現の仕方などの英語力が少しずつ確実に向上していることが、よくわかる。当然、登下校時のスクールバスの中でも、日常生活の中でも、英語が必要不可欠な社会での生活である。

子どもたちは登下校時は安全上の理由から、スクールバスを利用している。4月に、学校で雇用している警備員、スクールバスの運転手の紹介をした後、バス利用の仕方、あるいはハイジャック避難訓練を実施している。スクールバスの中で異常事態が起きた時にどう対応するのか、交通事故のとき、バスルートが通れないときなど臨機応変に異常事態を回避する必要がある。従って、添乗員や運転手がどんな言葉で子どもたちに指示するか、実際に練習をし、緊急時の英語を学習させている。一方、運転手と警備員には緊急時の対応マニュアルを説明したり、毎日の運航時に発生する細かな問題点についても、逐一協議をして改善していくようにした。

3年間の派遣期間中延べで5名の英語講師が関わった。1年目はジョージナ・フーパーボックス先生とステファニー・キン先生。ジョージナさんは岡山県倉敷市でALTを務め、帰国後2008年日本人学校に採用された。2011年神戸大学に留学するため、日本人学校を退職。ステファニーさんは、2007年から5年間日本人学校に勤務し、同じく2011年にALTとして宮城県仙台市へ旅立った。2013年3月に日本人と結婚後大阪在住。2年目は、ジョージナさんの後任はローレン・マーフィーさんを採用したが、自己都合で3カ月で退職。その後任は、シェリー・ハートレイさん。この方は、英語を第二外国語として指導するESLのプロで語学学校に勤務していた経験がある。ステファニーさんの後任は、男性でマーテン・ファンウィクさん。彼は音楽家でオーケストラの指揮者でありピアニスト。高校と大学で数学を教える天才である。オペラ座の怪人では、劇場で指揮をしていた。彼はシェリーさんともうまく連携して指導してくれた。これらの講師に英語を習い言語能力が高まり成果を上げた。勿論、彼らの採用に際しては、学校運営委員会の人事担当者、校長、秘書、英語教諭のメンバーで面接を行い決定するという作業を綿密に行った。

(3) 地元の人たちとの日常生活～異文化理解

学校の中はほぼ日本と同様であるが、教員以外の雇用者は当然のことながら現地人である。校外学習などで出かける場合には、地元の人が対応してくれる。在外教育施設で生活をするということはそれらの人たちとの日常に触れ、何かを感じ取っていく機会があり、これがもっともよい教材となっている。そこでは教員も同時に異文化理解をする好機となる。地道に身近な人を通じて触れて得たことは、日常的な習慣であり生活に根差した文化であり、まさに異文化に直接触れていることになる。ドライバーや警備員、英語講師といった学校職員がよく接してくれたので、異文化理解という意味では貴重な存在である。しかしながら、海外に住んだからといって異文化理解が十分かといえばそうではない。話は海外生活などという大げさなことではなくても、隣の人との生き方の違いを理解することから、異文化理解が始まると考える。教員が各都道府県の異なる文化をそれぞれが抱えて生活している。それを理解することは相当なエネルギーを要する。同じ日本人同士なののである。自己主張・自尊心がときには、協調性に支障をきたす場合が少なくない。

(4) 安全対策と避難訓練

日本人学校の安全対策は、子どもの学校生活に直結したものであり、避難訓練は自分の命を自分で守るための最低限の心構えを持たせるための教育活動である。世界一犯罪発生件数が多いといわれるヨハネスブルグでは、ことさら重要なことであった。バスハイジャック避難訓練、不審者侵入時避難訓練2回、暴動発生時避難訓練、火災避難訓練を年間通算5回実施した。各訓練ごとに大使館から、警備対策官をお招きして講話をいただき充実を図った。

安全対策上学校の敷地は、塀で囲まれている。塀の上には有刺鉄線を張り巡らし、更に8～

10本の電線が設置され常時高圧電流を通電し外部からの侵入を防いでいる。大きさに感じるかもしれないが、設備を充実させる前に、実際に本校でも侵入者があり被害にあっている。犯罪発生件数が日本の約100倍ともいわれるこの地で、安全確保の徹底は日本人会、大使館、学校運営委員会の総力で対策が取られていることを付け加える。外務省からは学校の安全施設整備事業（防犯警報装置、防護壁など）と警備員の配置にかかわる警備会社との契約に対する安全対策費の国庫補助があった。

5 在外教育施設の管理運営上の諸問題等

学校運営委員会は、校舎の営繕から維持管理、財政面での対策やスクールバスの管理運営等の諸問題に対して、迅速に対応していただいた。また、ボランティアによる学校図書室の維持管理など、さまざまな方面からの支援により学校運営が成り立っている。

施設設備および備品等への対策は、学校運営委員会で協議のうえ学校が保守点検を行い、地元業者に発注して購入・補修・修繕を行うのが一般的である。校舎維持管理は、児童生徒にとって良い教育環境が整うよう安全点検日を設けて営繕に努めた。そして、大規模な補修の要するものについては、毎年外務省の校舎特別修繕費の補助を受けて修理を実施した。

築後29年となり校舎の老朽化に伴い、屋根、電気系統、床、冷暖房器、上下水道、天井、防犯施設など、さまざまな補修が必要であることが課題である。

また、人事関係においては、現地で採用していた職員の高齢化、現地英語講師の採用、警備会社との契約、スクールバスの運転手雇用など人的資源の側面と、雇用条件、そして、業務内容の改善など、日本とは異なった社会構造を持っている国での雇用責任問題等も発生するため、学校運営委員会に対策を依頼し、弁護士との相談や雇用条件の整備等を各企業の法律担当部署の協力を得ながら対応しているのが現状である。

6 南アフリカ共和国での生活

ここでは、一般論はさておいて、プライベートな3年間の生活について述べることにする。赴任が決まった時には、手っ取り早く情報を得るために本屋で市販されているものを利用した。しかし、生活をするとなると見えない部分がほとんどで、そんなことを解決してくれるのが現地に住んでいる人からの情報である。いわゆる「赴任の手引き」である。しかし、書かれている内容は、現に住んでいる人の感覚で書かれたものであるため、赴いたことのない者にとってはなかなか想像がつかないところも多々あるものであるが、参考になることは間違いない。海外生活は初めてではなかったもので、戸惑うことはあまりなく準備ができた。

(1) 赴任したその日から生活が始まる

早朝にもかかわらず、出迎えに来てくれた方々に大変申し訳ないと思いながらの第1日目である。成田空港から定時に離陸した飛行機が、乗り継ぎのために香港に到着したところまでは予定通りだが、乗り換え便が3時間遅れて出発したため、ヨハネスブルグのORタンボ空港にはやはり3時間遅れで到着したので、出迎えの人たちにも結果的に3時間も待たせたことになった。その後スクールバスで空港から学校までの道のりを、いろいろな説明を受けながらあっという間に過ぎた1時間。街の様子をガイドしてもらったが、どこがどこかピンとこないまま、学校に到着。派遣教員が心をこめて準備してくれた歓迎会。自己紹介など済ませた後、レンタカーの手続き、銀行口座開設の手続き、南ア通貨に換金するための手続きと、携帯電話の取り扱い等矢継ぎ早に生活の基盤作りが始まった。ベンベヌートホテルに到着したのは学校での段取りがある程度済んだ後、午後5時過ぎ。時差が7時間あったので、すでに真夜中の感覚で夕食もそこそこに爆睡することとなった。レンタカーを自ら運転し、スーツケースと段ボールをトランクに積み込んで走った道のりは、5キロメートルほどなのにとっても長く感じ、車の多さに緊張しっぱなしであった。

(2) サッカー ワールドカップ

5月は(2010年赴任2ヶ月後)にわかに、テレビの取材や、要人の訪問の予定などが目白押しであった。たとえば、5月22日(土曜日) NHK BS1チャンネル 日本時間午後1時から午後11時50分まで、「ジャパンプルーに託す夢〜徹底解剖! FIFA ワールドカップ2010」。この番組が南アフリカから中継された。日本人学校から生中継で放送された。日本時間の午後5~6時の中のどこか5分位との話だが、Liveだ。

6月6日(日) NHK 総合テレビ 「こども週刊ニュース」という番組でも、日本人学校から中継で収録したものが放送された。午後6時からのコマだ。生徒会の子どもたちがインタビューに答えた。

6月は、ワールドカップ大会に向けて、日本戦のあるところは、日本人会で応援バスがでることになり、学校も臨時休業にしてわが侍ジャパンを徹底的に応援する体制にした。

日本の報道機関の取材のために、全校25名の子どもたちは、応援のための横断幕を持って写真を撮ったり、参加国のユニフォームをきて写真を撮ったり、ワールドカップのためのディスキーダンスを練習して踊りをするなどで盛り上がっていた。朝会で、ディスキーダンスの練習をし、休み時間には横断幕を持って写真撮影と子どもたちも忙しい1日を送った。日本サッカー協会から、チームシンボルの「やたがらす」(鳥のカラスで三本足)を折り紙で作成するための依頼が来た。つい先ほども追加の折り紙が1000枚届た。子どもたちはみな、大きい子は小さい子に教えながら休み時間ごとにヤタガラスを一生懸命折って、2千数百羽にもなった。

6月23日、日本のサッカーチーム「侍ジャパン」をひきいる大仁団長(現 JFA 会長)と名誉総裁高田宮憲仁親王妃久子様および日本国大使館小沢大使夫妻が、日本人学校をご訪問された。2010年は、南アフリカ共和国と日本との交流100周年の記念すべき年で、サッカーばかりではなく100周年記念に関するさまざまな行事がここヨハネスブルグでも開催された。当日は、名誉総裁が JFA の記念ペナントを校長に授与され、校庭には交流100周年の記念に「オオヤマザクラ」をご植樹された後、授業などをご参観された。妃殿下が子どもたちに励ましのお言葉を述べられ、大変有意義であり一生に一度の貴重なひと時となった。

(3) 労働者の生活

ヨハネスブルグは、サッカームードがかなり盛り上がっていたが、労働組合はこの機会に政府に対するストライキやデモンストレーションで賃上げ要求待遇改善の動きを活発化させていた。一方、日本から送った船便の荷物がうまく届くか心配だった。荷物の到着が生活に直結しているのも、サッカーもいいけれど、労働者諸君の良識ある対応に期待したいものだ。何故なら、船便には冬服が入っていて、これから冬に向かい寒くなる前に到着する予定で発送している。それが、前の週から鉄道組合がストに入り長期にわたって続いていた。運輸関係の組合もストに入っており、どうなるのだろうか。季節は、秋から冬に向かっていった。日中は20度前後と大変過ごしやすいし毎日快晴で、天気は左右されることがないのは最高だが、朝晩は7度前後まで冷え込むし、防寒着が必要であった。買えば済むことなのだけれども。

政府は、世界にワールドカップ開催成功をアピールしたい。だから、何としてでもインフラ整備を含めて、様々な面で世界に充実した姿を見せたいわけだ。ところが労働者は、あせる政府の動向を見極めて、このタイミングでストライキをすることによって、政府は言うことを聞かざるを得ないところまで追い込むわけだ。さらに、ワールドカップ大会開催中にもかかわらず、会場の警備に当たる警察や警備員達も、賃上げを要求してストライキをした。結果は、若干200ランドほどの賃上げが決定したようだ。

赴任した2010年の通貨南アフリカランドは1ランド13円だったのが3年間のうちに3円ほど価値が下がってきた。一方、物価は毎年5%~8%の上昇があり、インフレ傾向のために生活も楽ではなくなってきた。そのためのデモンストレーションであった。

南ア国内は車社会であるので高速道路網が発達している。有料道路も存在するが、無料区間

もある。ヨハネスブルグの市内のN1と呼ばれている高速道路を有料化にするという政府の提案に、ANC青年部が全国を巻き込んだデモを展開するなど、度々生活条件闘争などもあった。そのような場合には、子ども達の安全上、スクールバスの運行経路を変更したり、デモの時間帯を避けて登下校をさせたりと、学校運営上の対応も求められた。それとは別に、天候の影響での対応も行った。南アは雷の発生条件が整っており、世界でも有数の落雷頻発国である。盥を返したような短時間の豪雨と同時に3秒に一度といわれるくらい雷が発生する。その影響で停電がちょこちょこ起きる。それとは別に、電線が盗難にあうことも度々である。いずれにしても停電になると、学校内の電源は機能しなくなるので子ども達の安全確保が困難となる。従って、そのようなときには臨時休校の措置もやぶさかではなかった。

(4) 危険とは



どの時代でもどこに行ってもこの「危険⇔安全」は付いて回る。日本が安全な国か？という決してそうとは言い切れない。日本人は日本が一番安全だと思っている。これはどこの国の人も一緒に、自分の国では安全に過ごすことができるのだ。自国の危険性を熟知しているので安全に過ごすことができる。日本にも危険な地域があり、犯罪も起き外国人も巻き込まれたりしているから、その一面だけを取り上げると危険な国になる。しかし、どう考えても日本が一番安全な国に映る。W杯時のメディアの取材では、「南アフリカ共和国は危険な国」という紹介が非常に多かった。

そこだけを見ると、そんな危険な国によく住んでいるなあということになる。ところが、危険なことが多いので、防御策をしっかりとって日常十分注意をして生活すると実は「比較的安全」に日々を送ることができる。日本の安全は、自分自身が何も防御策を持たなくても周りが守ってくれる安全観ではないかと思う。外国では、自分自身の安全は自分で守ることが基本だ。そこが、根本的に異なるのだ。その防御策を「物々しい」と感じるか「当たり前」と受け止められるかで危険度の感じ方が異なるのだと思う。「写真左：個人宅の玄関にバークラバーという鉄格子で侵入防止のための対策。」



「写真右：住宅地や学校・公共施設の塀の上に敷設されているエレクトリックフェンス。（電線）9千ボルトの高圧電流が流れているので侵入防止になる。」これらの対策をしているので、この中は比較的安全だ。

ヨハネスブルグの街の様子を見ていると、地元の人たちは（80%は黒人です）普通に道路を歩いているし、普通に買い物をしていたり、立ち話をしていたり、カップルで過ごしたりしている。白人も黒人も関係なく過ごしている。が、特に日本人は珍しい。やはりこの国でも日本人は金持ちの印象だ。ゆえに「ハイバリューターゲット」となり金品強奪の的となりやすいという意味で、南ア国民のように自由自在に路上歩行ができないので、常に自家用車でドアツードアの移動を心がけることが危険回避の第1条件となる。犯罪発生率はアメリカ合衆国の8倍、日本の100倍等と言われている。なぜこのように危険な国であるのか。

一つは、近隣の国から外国人が職を求めて流入した結果、就職できずに犯罪に走る人が多いということだ。南ア国内でも特に外国からの移民が多いのはヨハネスブルグだ。経済の中心地であり流行の先端に行くコスモポリタンでもある。ここだけ別世界ということもよく言われるほど全くアフリカらしくないアフリカの都市だ。隣国から夢を見て夢を追いかけて大都会ヨハネスブルグに来るのだが、現実には甘くないようで、白人でも就職難で物乞いをしているのだから、貧富の差はいたるところに生じている。

もう一つは、政治が不安定だということだ。政府の打ち出す政策に市民が不安を抱いているのでなかなかうまく統制がとれないというのが現実だ。公務員労働者は待遇改善に向けて3カ月以上ストライキをしている。サッカー大会が終わらないうちから警察官・教員などの公務員がストに入りデモをしている。それも具体的に解決に向けた妥結点を見いだせないかのような混乱ぶりだ。その背景には政治家による汚職問題が見え隠れしている。大臣クラスの贈収賄事

件が大きく新聞で報道されるようになってきた。そうなるとなおさら混乱を招くことになっていく。これらのことを総合して考えるとやはり、この社会にも様々な犯罪や事件・事故が起こる要素を多分に含んでいる。

そんな危険な街で、一体どのように生活しているか知りたくなるだろう。一步も外に出られないじゃないとか、ドアツードアはいいけれど買い物や用足しはどうしているのだろうと思わなかっただろうか。

赴任する前は、「ええええ？ 街の中を歩けない？ グラブ&スマッシュ？ 駐車場も気をつけろ！」という情報に、どぎまぎした。いや、確かに道行く人々の背格好は大きくて逞しくボブ・サップやオスマン・サンコン、はたまたブッシュマンで有名になったニカウのような人々が住んでいる街だ。要するに様々な人種の人々が住んでいるのだから、どこの外国人が住んでも珍しくはない。しかし、東洋人では中国人は中華街を作るほど大勢住んでいて、ときどきチャイニーズかと声をかけられる。そのたびに否定している、日本人だと。韓国人も住んでいるがやはり日常生活ではあまり見かけない。他の国と同様に、日本の技術や物資は質が高いということは浸透している。日本からの商社、生産部門や技術部門の南ア進出により大変好感を持って受け入れられている。

好印象は高価値に結びつき、経済発展の見本のような日本は、人も含めて高額のイメージがあるからだ。イメージ先行と短絡思考により、日本人イコール金持ち、狙えば金品が得られるというフローチャートが成立しているようだ。

<日本人会の楽しみ>

9月～10月は運動会に学習発表会等の大きな学校行事が続けてあった。運動会は、日本人会の会員や、現地校に通っている日本人の子どもたちも一緒に競技をして、楽しく過ごした。また、日本人会が主催する春祭りというのもこの時期にあった。日本の秋がこちらでは春だ。ヨハネスに駐在している各企業が屋台を出して、縁日風の催しものと希望者でスポーツを楽しむ行事だ。学校の近くの住人も招待したため、昨年より人数が多かった。やはり習字とか折り紙などに興味があり、好評だった。終盤には盆踊りを踊る。その為に、PTAが熱心に練習をし、当日は先導してくれた。三池炭坑節・東京音頭・花笠音頭を大きな輪になって踊った。そうやって、外を自由に歩けない我々は、丸1日を学校のグラウンドで楽しんだ。そして、あっという間に2カ月が過ぎ、クリスマスへ向かって日が進んだ。

(5) クリスマスと新年

ここ南アフリカのヨハネスブルグでは、24日のクリスマスイブには、家族や知人が集まってブライイ(=南アフリカで使われているアフリカンスという言葉でバーベキューのこと)をすることが多い。北海道で言うジンギスカンの感覚だ。住んでいるクラスタ(住宅が集合して一つの村を作っている)のクラブハウスでも、クリスマスブライイを催していた。遠くからのぞいてみた妻は、皆きれいな格好で少人数ながら楽しそうにしていたと教えてくれた。回覧版で申し込みの案内が回っていたが、申し込まなかったのが残念なことをした。

25日クリスマス当日は全ての商店が休みになった。朝からとても静かで人がいないようだ。車も走っていないで勿論歩いている人もまばらだ。通りを車で走ってみても本当に走りやすかった。しかし、こういう時期は相当危険だそうだ。人がいないということは、どこから賊が飛び出してくるかわからない危険がある。走っている車は当然目立ち、信号で止まると襲われる可能性が高いと言われた。

7 在外教育施設で経験を積みたいと考えている人へ

派遣教員は、ほとんどが初めての海外生活である。一方、子どもたちは日本から移転してきたとは限らないので、日本の文化がベースにあるとは言いきれない。日本語は話す日本に住んだことのない子ども達もいる。また、将来日本には住まないであろう子ども達も本校の児童生徒である。この子たちには日本人学校そのものが異文化となる。従って、派遣教員自身の日本の生育環境のみを基にしては、在外教育施設では正しい判断をすることはできない。

最も重要なのは、指導力はもちろんのこと人間性である。それは、日本国内においても同様であるが、在外教育施設においては教員の責務は非常に重い。派遣前の研修でそのことを十分理解し、どんな困難にぶつかっても、教員は協調性を持って組織の一員として協働する強い信念を持ち合わせている人物の筈である。物見遊山でこの時とばかりに個人旅行を最優先するとか、現地理解という名を借りて地元に入り浸るなどは非常に問題である。財政的・物質的環境は代替が利くが、教員の資質の代替はできない。現地邦人の文化センターとして重要な在外教育施設においては、人材確保が難しい異国にあって、在籍児童生徒のために限られた時間の中で、安全かつ楽しく過ごすことのできる人材が必要である。求められるのは適応力と創造力と想像力である。当たり前なことを当たり前に行うことである。未経験の地であるからこそ安全に生活を楽しむ能力のある人材が求められる。

そのような視点に立って、在外教育施設での勤務から多くのことを学びとって欲しいし、帰国後の教育指導に生かしてほしいと考える。

8 エピローグ

ヨハネスブルグ日本人学校勤務と南アフリカ共和国の生活から、実に多くのことを再び学ぶことができた。そのうちの2点について述べ、まとめに代えたい。

その一つは、言語力である。生まれてからずうっと日本語に慣れ親しんできたが、人生の途中から外国語に興味を持ち英語にも慣れ親しんできた。外国の人々と話をするときは英語を媒介にするとよいのは世界的な傾向である。勿論、英語ではうまく伝わらない時もある。だが、最終言語はやはり日本語である。思考言語といってもいいが、物事を考えるときに使う言語は日本語である。日本人学校の子どもたちから学んだのは、日本人として日本語を忘れないようにしながら学んだ英語力である。いかに柔軟な成長期に日本語以外の言語を習得するか。そして、その言語を必要としている環境がどれほどあるか。これは、日本の学校で英語を習得する際の参考になることである。

日本だけで住んでいるのなら外国語は必要はないか？

二つ目は、日本人の相手を思いやる性質の素晴らしさである。先日、機会があって宇宙飛行士毛利守氏の話聞く機会があった。その時ショックを受けたことは、私たち日本人というけれど、日本人にこだわっていていいのかという問いかけであった。「Totalな社会の安定性・自由性は圧倒的に日本が高いのです。日本人の価値観を世界に広げていくこと、これは日本人の役割です。」この講演を聞いて、海外経験をした教員は子どもたちをグローバルな視点をもって、育てていく責務を負っていることを再認識した次第である。子どもたちは既に世界とつながっている。携帯、スマホ、パソコンを通じてインターネットで世界とつながっている。海外生活をして日本を見たとき、日本ほど安全な国は見当たらないし、自由な社会風潮も日本以上の国はないだろう。それに、日本人が誰もが価値観として知っている思いやりという価値観は日本人でよかったと思わせる素晴らしい価値観である。相手の立場を理解しながら自らの意見を言うことができるのは、日本人の得意技である。

英語あるいは他の言語を媒介にして日本人の価値観を世界に広げていくことができる日本人は、グローバル社会に適応しながら、その優れた能力を国の枠を超えた社会で発揮できるようになると考えるし、そうあって欲しいと考える。そもそも、一人のアフリカ人から始まった人類であるのだから、日本人がその価値観を世界に広げることがあってもよいだろう。